

ご あ い さ つ

北海道高等学校教育研究会

会 長 染 谷 昌 志

一日のうちで、日中の占める時間が次第に長くなり、春の色合いを周囲に感じる頃となりました。会員の皆さまには学年末を迎え、ご多忙の日々をお越しのことと存じます。

さて、平成 5 年度の本会の事業が、会員の皆さまをはじめ、関係諸機関・団体のご理解とご協力により終了いたしましたことに、心から感謝申し上げます。1 月 12・13 日には、第 31 回研究大会が約 3,500 人の参加者により開催され、全体集会及び教科別集会を当初の計画通り運営することができました。このうち、全体集会は、例年の会場である厚生年金会館ホールの舞台改修工事により、中島体育センター別館で行うことになりました。当日は、とくに会場復元の作業において、多くの方々のお手伝いをいただきました。全体集会及び各教科部会を通して、関係の方々のご支援にお礼申し上げます。

これからの高教研の活動上の課題として、本会の会員登録数が、昭和 61 年以来漸減の傾向にあることがあげられます。本道高校教育において信頼される研究団体として、さらに発展を期するためにも、会員数の増加に向けて努力してまいりたいと存じます。今後とも皆さまのお力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

このたびの第 31 回研究大会の全体集会においては、作家の C・W・ニコル氏から、「自然と人間」と題してのご講演をいただきました。エチオピアの山岳国立公園の創設に、公園長として 27 歳の若さで参画されたときの、植物、動物、原住民、密猟者とかかわりの中で、まさに自然と人間の共生を求める苦闘を続けられたお話から始まりました。さらに、日本人の自然観に興味をもたれ、自らの日本の山地での生活を通して、自然と人間の在り方について考え、行動されていることを、迫力ある日本語で話されました。また、日本の国立公園にレンジャーが不足しており、すぐれた人材の養成が必要と主張していたところ、その趣旨を生かした専門学校が開校になり、言い出した本人が副校長を引き受けるはめになったとのことでした。ニコル氏の自然への限らない愛着と、人類の未来への深い思いが、私たちの胸を強く打ち、会場にも共感と感動の思いが満ちておりました。

もうお一人の全体集会講師として、北海道大学の若井邦夫教授から、「子どもが発達するとき——必要とあそびのあいだ——」と題してのご講演をいただきました。先生は、発達の姿にはいろいろあり、「まっすぐ」もあれば、「ジグザグ」もあり、「ジグズデン」や「ザグズデン」もあるとされ、子どもの育ちを見つめる視点の重要性を力説されました。そのためには、子どもが自分を個々として認められ尊重されていることを実感でき、達成感、成功感を十分に味わえるような状況を作っていく必要があります。高校時代は、自我同一性や世界観・人生観の形成期であり、この時期にあくなき知的好奇心、批判的思考力を身につけさせたいとのご指摘がありました。あそびの時期を切り上げて勉強に専念するとか、勉強は仕事につくための準備であるというような、段階的な区別でなく、生活の中でそれらが統一的な活動としてとらえられ、必要とあそびのあいだで、若者のバランスのとれた発達が見られることを願って、私たちも学校での日常の実践に努めたいものと考えます。

大会二日目の教科別集会におきましては、参加された先生方のご熱意により、充実した成果が得られております。各講師のお力添えとともに、提言・助言・司会・記録・運営等に当たられた先生方、また会場を提供された関係機関に感謝申し上げます。

平成 6 年度を迎えるにあたり、会員ならびに関係各位のご健勝とご活躍をご祈念申し上げ、これからの本会の充実と発展に期待をかけて、ごあいさつといたします。

第31回研究大会の報告

日程第一日・全体集会

全体講演・午前の部

〔講演要旨〕

自然と人間

作家 C.W.ニコル 氏

前に私はエチオピアの大変美しい所で国立公園の新設に尽力した。政府の士官に任命されて様々な困難に挑戦した。

まず治安が必要だった。公園内の交易路をねらう山賊と貴重な動物を売りさばく密猟者を掃蕩するのだ。私自身も武装して22人の部下と共に6ヶ月の戦いで野蛮な山賊を片づけたが、私も自分が驚く程の獰猛な人間になっていた。危険な罠を使う悪質な密猟も多く、私一人で203人も逮捕した程だ。

次なる敵は賄賂で、せつかく密猟者を何十kmも離れた街へ護送しても釈放されてしまう。我々は犯人を捕えたその場で痛い目にあわせ、思い知らせる他に術がなかった。

又、大切な事はそこには住む人間だ。強制移住も検討されたが、私の考えで村人には公園の仕事を与え、自然との調和を目指した。

まず、殆んどの人が字を知らないで、一人一人に国立公園の意味を説明した。しかし村は本当に貧乏で大変だったのだ。学校もない、警察も来ない、仇討ちが横行する、子供は6歳までに67%死んでしまう。やがて部下の家族にも発疹チフスのため死者が出始めた。薬の調達を国連にも求めたが「お前は医者ではない」というセクショナリズムそのものの断り。給料の半分を1個1ドルのヤミ薬につぎこんだが足りず、私は誰を救うかを決定する神様になっていた。初めは美しい自然を守るつもりで来た私だったが、すぐに自然保護の中で人間を忘れてはいけない事を悟った。人助けの為、ずいぶん芝居やウソをトリックに使ったし、畑作りや教育にも手を染めた。

村人が木を伐りすぎると生態系のバランスが崩れて砂漠化や害獣の大発生が起こる。村人の生活を守る為、沢山のヒヒを射殺せねばならなかった。これも自然保護なのだ。見学者や動物の為だけではなく、そこに住む人間の為まで考えなければ自然保護はできない。私はいつも混乱し、つらかったが、やりがいはあった。獰猛なニコルは消えていたのだ。

やがて私は国立公園のすべての存在が水の循環に支えられている事を悟った。そして生涯をかけてこの水を守ろうと思うようになった。しかし、とうとうレインジャーには勝てない敵、すなわち最新の武器を持ったゲリラが現われた。私は止むなくそこを去る事になり、日本に帰って来たのである。

平和で美しい日本の自然に喜んだのも束の間であった。自然破壊のペースの速い事。そして昔の様に自然と遊ぶ子供が何と少ないことか。ネイチャー（自然）がマイネイチャー（自分の人格）を作るのである。豊かな、変化あふれる日本の文化、「日本人」の危機ではないだろうか。

日本は世界的にも豊かでお金も使っている。しかし自然を守る人が本当に足りない。私もこれからそんな人材を育成する学校の仕事を引きうける。グチを言ったり、悩んだりしてしないで、具体的に行動しなくてはいけないと考えるからである。



全体講演・午後の部

〔講演要旨〕

こどもが発達するとき

——必要とあそびのあいだ——

北海道大学教授 若井 邦夫 氏

最近の教育には「間」がない。時間的なゆとりがなく短時間のうちに色々なことをしようとし、空間的なゆとりもなく活動場所が限定されている。また、仲間の「間」もない。つまり対人関係が希薄で大勢の人がまわりにも、そこに仲間ができない。これではダイナミックな学習活動にはなり得ない。

北大教育学部では、今年度後期から子供の出会いと発達を描いた文学作品を取り上げ、グループで登場人物の性格・成長等の分析を行わせ、報告させるという試みを始めている。グループで読むことにより作品の捉え方が違ってくこともあり、グループ作業の楽しさを再発見したという声も聞かれた。

乱暴な言い方をすれば、もっとのんびりとしたゆとりがあっても良いと思う。つまり、最近の文化は「死に急ぎ」の文化に見えてしまう。見通しのある目標に向かってではなく、ただ闇雲に急いでいるように思える。親にいつも「早くしなさい」と言われる子供達、算数・国語の悪いところのみ指摘され体育・図工の良い部分に目を向けてもらえない子供達。人間にとって一番のくせ者は「不安」であり、「ピリでも良い、一生懸命やれば良い」といった、不安状態に陥ったときの「逃げ場」を用意してあげることが必要である。

また、「厳しさ・方向づけ」という父親の役割と「困ったときの駆け込み寺」的な母親の役割とが、

最近の親子関係の中で逆転してしまい、これが最近の問題点の一つになっているのではないだろうか。

ところで自分の高校時代を思い出すと、「わかるか？」という確認を繰り返した後には「わかれ！」と言った数学の先生、李白の詩の朗誦してくれた漢文の先生のことが忘れられない。理屈だけでなく「感覚のひだ」に刻み込まれることもある。化学の実験なども印象に残っている。興味・関心・動機づけがいかに大切か。更に、いろいろな人との出会いが重要であり、出会いが発達を促す。教師と生徒との出会いは選択できないが、教師の人間性がその際に問われると思う。

発達の姿にはいろいろある。見廻りながら目標に向かう「探検コース」、遠まわりをしても確実に向かう「巡検コース」、最短コースを強引に進む「急行コース」など。この際、「ジグザグ」、あちらこちらに登る間に「ズデン」という転び、つまり道草・無駄があっても良いのではないか。道草の良さ、無駄の効用もあり、時間だけを考えた「効率」教育で果たして良いのだろうか。また、失敗から学びとる力のような「生きていく力」を育てていくことも必要である。

最後に高校教育への期待を述べると、この時期はしっかりした自分を作る時期であり、「自ら怒り己を恥じる」存在であってほしい。行動・判断基準をしっかりとち、必要なときには自己主張できる主体性が求められている。自分で何も決められない子供がいる一方、自己主張のしっぱなしの子供も多い。

「自ら怒り、己を恥じる」ということについて共に考えていきたい。



日程第二日・部会別集会

国語部会

〔講演要旨〕

「言語教育を考える」

北海道教育大学札幌校助教授 吉見 孝夫 氏
日本語教育と国語教育は同じ日本語の教育であり無関係ではいられない。日本語教育の場では、文法研究を取り入れるのに熱心であり、それは、日本語を学ぶノンネイティブからの質問に答える形で進んできている。但し、高校までの基礎教育の場に、このような文法研究の進歩・変化はそのまま反映されないし、またその必要もない。

しかし、別の意味で、言語教育は今までの枠組みを再検討する必要があるのではないか。これは、日本語の国際化と関係している。「日本語をネイティブとノンネイティブが共有する」——これを認めることが日本語の国際化ということであろう。こう考えると今までの言語観で良いのか、という問題に到達し、内向きの言語観から、外向きの言語観へ進まざるを得なくなる。その意味では、言語教育の中で、国語学的知識だけでなく、言語学的知識にも重点を置く必要が生じてくる。

そこで言語教育を再検討する一環として、言語教育における「正しさ」の根拠について考えてみたい。言語における「正しさ」には二つの見方・立場がある。一つは正しくコミュニケーションができるという意味での「正しさ」。もう一つは正しい発音・文法という意味での「正しさ」である。両者は矛盾はしないが、時として対立する場合があり、発音・文法は正しいが内容が理解できない、またはその逆の場合がしばしば起こっている。具体的に、表記法における「正しさ」について考えてみると、そこにどれだけの普遍性があるであろうか。たとえば「字体」の正しさは、時代によって違う。この字体が正しいと決めたから正しいというだけのことであり普遍的真理ではないのである。文法上の問題についても同様である。文法とは文を構成し運用する規則であり、その中のある側面に、ある立場から説明を試みるのが文法論である。それはあくまでも一つの仮説に過ぎないのであり、文法は一つだが、文法論は無数にあるということになる。その意味では学校文法もまた一つの仮説に過ぎないと言えなくもない。では学校文法の「正しさ」とは何か。生徒は絶対の真理と受け取りがちであるが、そこには様々な問題点がある。上一段と下一段の区別は必要か否か等、どちらの考えが良い悪いではなく、あくまでも学校

文法も一つの仮説に過ぎず、別の仮説もあり得るということである。歴史的に見ても、永久普遍的真理という意味の「正しさ」はない。歴史的な影響力の差、すなわち歴史的な偶然の産物である。

言語教育を再検討する場合、その「正しさ」には客観的真理や普遍性を持つものではなく、あくまでも、偶然の産物であらうという認識に立つこと。この認識を持つか否かが大切であり、そのことにより教え方にも違いが出てくると思われるのである。

〔研究発表〕

①「論理的思考力の育成を目指して」

～構造分析のパターン化についての一試行～
紋別北 青木 裕治

主体的な学習能力の育成のために、「生徒が自ら考える論理的思考能力の育成」を目指し、文章構造の分析を試みた。授業においては (1)題名分析 (2)頻出語の摘出 (3)アイロニーやパラドックの発見、というように分析の手順をパターン化し、生徒が自主的な読解作業をスムーズに行えるよう配慮して授業を行った。

②「漢文に注目し活動させる入門期の漢文指導」
～生徒の意欲を刺激し、表現指導を

積極的に取り入れて～
稚商工 江川 順一

漢文理解の基盤は漢字理解にあると考え、漢字に対する抵抗感を和らげることから漢文教材へと誘った。

授業を行うにあたっては、平仮名の字源としての漢字の理解や、群読による音読指導、視聴覚機器の利用など様々な面から生徒の意欲を刺激するとともに、主体的に取り組ませるために、生徒にとって身近なものを題材にし、五言・七言の漢詩を製作させるなど表現活動を中心にした指導方法を取り入れた。

③「国語Ⅰ（現代文）授業展開の一考察」

～テーマに即した授業内容と

教師集団としての工夫～
札幌開成 武田 克信

「論理的思考能力の養成」をテーマに、国語科内での討議・打ち合わせを活発にしなが、教師集団が集団として授業、そして生徒と関わっていった実践が報告された。

本年度は、国語Ⅰ（現代文）について「青春」「ことばとレトリック」「仮説と実証」「法と社会」

と4つのテーマを設定し、年間計画の作成・手直し、自主教材・補助教材の選定とそのマニュアル作りなどを教科担任会の話し合いで確認徹底しながら、何をどう教えていくかを教科教師集団として恒常的に実践していくこととした。

社会部会

全体部会

〔講演要旨〕

「細川政権と政治改革」

北海道新聞社編集局政治部部長 山本 研一 氏
昨年の総選挙の結果誕生した細川内閣は次の3点の特徴を持っている。1つは8党派で連立与党を構成するガラスの城＝モザイク内閣であること。2つ目は新生党の小沢氏が実質的な舞台回しをする二重権力構造であること。そして3つ目は政治改革の錦の御旗とする一枚看板内閣であるということである。

そして、これが誕生する背景には総選挙の結果に危機感を抱いた小沢氏の存在がある。

つまり自民党を離党した小沢氏が自民党を包囲するために、細川氏を首相にそして土井氏を衆議院議長にすることで日本新党、さきがけ、社会党護憲派までも連合の山岸氏と会談し結集したのであり、まさに小沢氏と自民党の権力闘争とも言えるのである。従って自民党政権を倒すという大義名分のみで連立政権に参加した社会党と、小選挙区の導入によって保守の2大政党に収れんして強力なリーダーシップを持つために政治改革を主張する小沢氏との隔たりは大きい。小沢氏の提唱する普通の国はその国家主義的考え、権力志向の延長上にあり、両者の根本的違いによって細川内閣のもろさ、弱さが露呈されている。

そして現在最も重要な課題が政治改革関連4法案の成否である。個人的に言えば、小選挙区制による民意の反映度、3%阻止条項による小政党排除、腐敗防止面での抜け道、そして政党助成金による政党の独立性という点で不満や問題を感じている。しかし、歴史はらせん階段的に発展するものだという意味からすれば、法案の成立は半歩でも一歩でも前進したと考えることもできるだろう。そしてその成立の見通しであるが、多少の不確定要素はあるとしても成立の方向に流れていると言え、今後の政界再編にも大きな影響を与えることになるだろう。

もし成立した場合、小選挙区比例代表制の選挙となるので8党派の統一候補が条件となる中で、社会党は護憲派とデモクラッツとに分裂し、デモクラッツは日本新党、さきがけ、自民党改革派と連合する

勢力となって小沢・公明党ブロックとは一線を画することになるだろう。そして政治改革を一枚看板とした細川政権は本格政権を目指すことが考えられる。又、不成立の場合にも混沌とした政治状況下において、好むと好まざるに拘らず政界再編が進むことになるだろう。

こうした動きは、日本の近現代史が40年程のサイクルで転換期を迎えるという歴史の流れから起こったもので、冷戦構造の崩壊という世界的変革とも連動しているのではないかと感じている。しかし、最近の自治体選挙の投票率は20～30%台の低さで政治への絶望と無関心の反映と言える。現在の高校生も又政治的無関心であると言われるが、歴史的に見るとそういう時にファシヨ的強権政治が出現している。従ってそうした状況を回避するために先生方をお願いしたいのは、授業の中で政治における有権者としての自覚を生徒に訴え、強調してほしいということです。

現代社会部会

〔講演要旨〕

「国際先住民年を振り返って」

二風谷アイヌ文化資料館館長 萱野 茂 氏
講演の前半は大正15年に平取町二風谷に生まれた萱野氏ご自身の生活史・体験に基づいてお話が進みました。紹介された葬儀等の日常生活の中での様々なしきたりから改めてアイヌ民族独自の自然観・生活観がうかがわれ、また氏の祖父の少年時代の厚岸での強制徴用のお話や、和人による一方的な鮭漁制限により密漁の罪状を着せられ、息子への影響を気づかって籍を別にした父のお話などからはまさに「民族の痛み」を自身のものとして刻んでこられたことが穏やかな語り口だけに逆に我々には深く伝わってきたように思います。

後半では戦後、和人学者によるアイヌの墓あばきなどの略奪的な村への「調査」に対し危機感を抱いて始められた萱野氏のアイヌ民具の蒐集活動が二風谷アイヌ文化資料館設立へと結実し、さらには急速に失われつつある民族のこぼれを遺す活動としてのアイヌ語教育の基盤作りやアイヌ語辞典の編さんなどに取り組まれてきた経緯が紹介されました。

こうした氏の活動はすなわち北海道の「先住民」として固有の文化を持つアイヌ民族の民族自決権の保障をわが国政府に求めていく運動につながるものですが、現状としてこうした動きに対して行政は国際先住民年を迎えた昨年も「先住民」としてのアイヌの存在は認めない立場を貫き、何らの経済措置も

取ってきていません。氏はその点を批判しつつ「ぜひ改めて教室で国際先住民年の持つ意味を考えてほしい」と呼びかけました。講演の結びに静かにユーカラを吟じたあと「この続きはぜひ二風谷で」と微笑まれた氏に対し我々がどう応えうのか、「内なる国際化」に向けて大いに問われた所のように思います。

〔研究発表・研究協議〕

後半まず士別商業高校毛利禎晴教諭から「刺激のある、印象に残る授業を目指して」を主題に研究発表が行われた。この中で授業に消極的な生徒を引きつけるのは、新鮮な教材を教師が自分の個性・視点で生徒に提示できるかにかかっている。そのために幅広く雑誌・新聞などを活用すべきであると強調された。

その後、「国際理解」をテーマにした現代社会部会編集の授業実践報告集からの発表がなされた後、萱野氏講演をふまえ「先住民族としてのアイヌの人權」「異文化との接触や理解をどう深めるか」などのテーマにしばり各学校での取り組みなりを参加者から発言してもらった。この中では、どのようにアイヌ問題について教えればよいのか自信がない、教え方を誤ると差別を助長することにもならないかという意見やまず教員間でのアイヌ問題の学習を検討しているなどの発言があった。

最後に助言者から、人間の在り方・生き方を身近な問題から切り込んで生徒自らが考えていく科目としての現代社会において国際理解教育がさらに重要度を増してきており、その中でアイヌ問題も足元から考えられなければならないとのお話があり、分科会が結ばれた。

日本史部会

〔講演要旨〕

「北方諸民族間の文化交流」

北海道大学文学部教授 菊池 俊彦 氏

1. 北方諸民族の歴史の展開・民族間の文化交流について。

アイヌ民族は、歴史的・地理的位置づけによって大きく、北海道アイヌ・千島アイヌ・樺太アイヌに区別される。その文化の成立については不明な点が多いが、13世紀頃の擦文文化との交流を受け確立したという説が一般的である。ロシア国内においては、民族的にツングース諸民族の移動に伴い辺境に追いやられた古アジア諸民族にアイヌ民族が属するという学説が支持されているが、日本ではその根拠が乏

しいとして否定的である。

2. 大陸と北海道の文化交流について。

白滝・置戸産出の黒耀石石器がサハリンから出土、さらにアムール川流域の編目文土器が標茶から出土するなど一万年以前から積極的な文化交流があったと考えられる。

3. 擦文文化とオホーツク文化。

アイヌ民族が擦文文化との交流があった一方でオホーツク海沿岸にはオホーツク文化と類似の文化が存在し、13世紀中頃からアイヌ民族との文化交流が盛んになったと考えられる。

以上のことからアイヌ文化が独自に形成されたのではなく、一万年以前から北方諸民族との文化的・人的交流が行われ、それを背景に形成されたのではないか。これらの視点に立ち北海道史を研究していくと、より多くのことが考察できると、講演された。

〔研究発表〕

「北からの日本史」=北海道の明治維新

登別 松本 徹

日本史の教科書は、都を中心とする中央からの視点に立って構成されているが、日本列島の歴史を考える上では、南西諸島や、北海道からの視点で考えることも必要である。

北海道史を授業で展開する一つの方法として前任校（大麻）で「北から見た日本史」を考え、その視点に立ち実践した。

授業の構成は、まず前段階で「琉球処分とオキナワ」という政府による日本人の同化政策について授業を進めた後、北海道に対する明治政府の政策についておこなった。幕末に蝦夷地を探検した松浦武四郎の著書「近代蝦夷人物誌」の中から「孝子ウナウシ」を教材として活用し、その中で場所請負制における蝦夷地アイヌの窮乏ぶりを説明し、彼らの人間性を通して明治維新に対する期待を開拓使長官への要望という形で予測させた。しかし政府の開拓政策は、現実には「同化政策」としての「北海道旧土人保護法」を成立させた。

この授業の中で、「確かに敬遠しがちの教材ではあるが、国際先住民年という視点に立てば、アイヌ民族の実態を理解していない生徒に間違った民族観・歴史観をもたしてはならない」とまとめられ、発表を終えられた。

世界史部会

〔講演要旨〕

「ヴェトナム・カンボジアと日本」

北海道大学法学部教授 坪井 善明 氏

1. ヴェトナムについて

ヴェトナム戦争に貧困は起因し、その傷害者に対する補償も十分にはなされていない状況にある。それに対して政治的には社会主義を堅持しながらも経済の自由化をはかる『ドイ・モイ（刷新）政策』をとり、経済の成長、発展がみられるようになった。

2. カンボジアについて

内戦で残された負の遺産は余りにも大きく、貧困と無数の地雷を残した。昨今民主的選挙が行われて正統政府の樹立をみたところではあるが、シアヌーク死後にポル・ポト派復権の可能性もありまだまだ余断を許さない状況にある。

3. 日本に求められていること

我々のこれまでの視座、姿勢をもう一度みつめ直し、その上で真に実効的な協力及びその社会的土壌をつくりあげていくことが必要である。

吉嶺茂樹（札幌西）、田中一秋（札幌平岸）、古田信芳（旭川北）の三先生の質問を受けたあと、助言者である山本良久先生（道研）が謝辞を述べて講演を了えた。

〔研究発表〕

本別 古本 幹彦

世界史分科会後半は、古本先生による「新教育課程における世界史の在り方について」というテーマでの研究発表があった。発表では、世界史必修化にあたって世界史授業が本質的な改善をせまられるとの認識が明らかにされた。そのうえで授業実践で具体例をあげての発表があり、さらに新教育課程についての展望を多くの人の意見より集めたいとの希望であった。前段の実践については、富山県での実例によりながら、受験に対応できる学力をつけさせる為には興味を失わせないような授業が必要とされる旨の説明があった。この為の方策として、古本先生の実践された、人物レポートの導入、新聞形式の人物レポートや“世界史小劇場”と題しての人物中心の授業展開等の紹介があった。特に世界史小劇場については、ウィーン会議に関して教材研究計画から授業案までの具体例により、古本先生の意図する人物中心の授業の概念が良く分かる説明をいただいた。赤間先生より授業で取扱った人物についての質問があり、フェルゼン、マリーアントワネット等劇的要素を持つ人物であるとの回答であった。後段では主に新教育課程における世界史の課題として (1)現代史をどのように指導するか。(2)世界史における「同時代史的」視点をどのように扱い、地理的空間的理解をどのように進めるか。(3)世界史の中で日本の歴史をどのように扱うべきか。の3つの観点から古本先生の御考えを述べられ、中村先生からネットワーク理論等の新しいつながりの可能性が指摘された。終りに助言者の山本先生より、新教育課程での歴史学習の転換の必要性と手法の多様化が今まで以上に求められるだろうとのお話があった。

地理部会

〔研究発表〕

(1)自己教育力を育成する

地理教育の在り方について

～視聴覚機器を導入した野外調査の取組み～

上ノ国 濱田 哲也

町内を流れる天の川の石が首都圏で有名になったことに注目し、野外調査にVTRを導入した授業を試みた。対象地域は天の川全流域とし、クラスから最も優れた1班を選び、VTR撮影と説明を行わせた。撮影地点は事前計画の際に描かせた流域地図に従った。

次に、このVTRを見ながらプリント作業を行った。始めに「天の川アンケート」を行い、続いてVTRの説明を撮影した生徒達が行った。残りの生徒達はVTRの説明を聞きながらプリント作業を行った。

多くの生徒は、身近な地域の特色に興味を持ったようであるが、生徒全員がVTR撮影と説明を行えなかったのは反省点であり、また、事前学習を充実させることが今後への課題である。

質疑では、菊先生より「天の川アンケート」に関する質問、三好先生より石の利用法と生徒の発想を結び付けてはどうかという意見、中田先生より「新課程」に向けた先進的事例であるという助言、村瀬先生より作業内容の吟味を通じて読図学習などへ内容を深めてはどうかとの助言を頂いた。

(2)自ら学ぶ意欲を喚起する

授業のあり方を求めて

～「観光教育」による異文化理解～

天塩 奥谷 忠浩

学力差の大きな中で、表題の目標を達成するために観光教育を行ってみた。具体的には、生徒がある国を紹介し、自分が旅行する場合の計画を発表する学習を試みた。

まず導入として、夏休みの課題の中で関心を持った国の概要をまとめさせ、その国への旅行を計画させた。発表の下調べには図書室を利用させ、教師の模範発表などを通じて視聴覚機器の使用方法を指導した。その結果、生徒の発表は、回を重ねるごとに聞き手に理解しやすいものになった。

評価に関しては、教師の評価に自己評価や他生徒による評価を加えた。また、小テストや定期考査を利用して知識の定着を図った。

この学習の結果、生徒の学習意欲が喚起され、成績下位者の成績が上昇し、上位者との学力差が縮まった。また、丁度アラスカから交換留学で来ていた生徒がいたのて、授業を通じて、生徒が異文化を知る機会も得られた。

質疑では、小松原先生より修学旅行と関連させてはどうかという意見、中田先生よりこの評価は観点別評価の一つの手本であるという助言、村瀬先生より今回の試みは生徒の表現力を養う上で有効な方法であるとの助言を頂いた。

倫理部会

平成6年1月13日札幌月寒高等学校において、社会科倫理分科会が開催された。

午後の倫理分科会の前半は、青森明の星短期大学助教授、井上摩耶氏を講師として、『実存主義と現代』の演題で講演された。

その内容は、実存哲学発生の背景として、19世紀西欧の精神状況と「神なき時代」としての現代を述べられた。

主観と客観による区別は、他人や物を含め未分化である状況では的を得ていない。人間は相手を認識する時、意味連関としてまると考え、付随物を全て取り去った時に、対象物(含人間)をとらえ、対象の中に自分が入り意味連関として存在できると説明された。

さらに、実存を現実存在と本質存在により説明された。現代社会は、現実存在について認識しているが、本質存在の代りになるものが周囲に沢山あるので、マニュアルの中から無理に納得している人が多いと。

そして、先生の専門であるハンデッガーについては、「死の最終目的地から人間の生き方を考え」日常の中で平均的な生き方は、常識という物指しでガードされているため、自己と直面せず、本来的自己から離れてしまう。その結果、不安な自分が存在しているのだと。

最後に、大学で哲学を取っている学生は、表面的

には明るく生活しているが、実は友達と深く話しをしたがっている。その契機には、高校の倫理の授業や、先生方の影響を受けている学生が多い。是非フランスのように若年時より深く考える事をしてほしいし、「高校の倫理では多面的な物のとらえ方による倫理をお願いした。」との言葉で講演を終了された。

予定の時間を超える、有意義な、そして考える事のできる講演であった。

分科会の後半は、別海高校の金森卓紀先生の『生徒の考え方を引き出す「倫理」の取り組み―「幸福プリント」を使用した実践―』を発表して頂き、研究協議した。

発表内容は、単位制高校の指定と相まって生徒の興味関心に答える、という視点より、「幸福プリント」を自分の幸福→各思想家の幸福→自分の幸福という形体をとり、そのプリントを生徒各自にファイルさせた。さらに定期試験の中にも、記述させる事を主とした問題を紹介した。

この発表の後、研究討議に入った。討議内容は、記述問題の採点基準の難しさ、文章量の設定、観点の自己作成、討論を中心とした授業展開、定期試験内容の事前告知により、深く考える基準をさせる等、多岐に渡る討議がなされた。

最後に、助言者の提昭義先生から、主体的な人間育成には「書く」事は有効な手段である事。困難点を克服して活用してほしい事が述べられた。さらに、これらのプリントを年間計画の中で活用すること等、今後の方向を示して頂き、分科会を終了した。

政治・経済部会

〔講演要旨〕

「政治改革と政治教育」

北海道大学教授 山口 二郎

昨年8月の細川内閣の成立、55年体制の崩壊という一大政治事件には、安定した一党支配と手を携えてすすんできた経済構造の歪み、冷戦の終焉により政党がたんに体制選択を訴えるだけでは自らの行動を正当化できなくなったこと、言論による説得を通じて合意を得てゆく新しい世代の政治家の出現、という3つの構造的な背景がありました。

一方、政治腐敗も、選挙民の清き一票という「供物」に対し、政治家が橋や道路などの「ご利益」を返すという構造に根を持ち、中央直結、大きな裁量権を持つ官僚組織、政党間の競争の欠如がこれを助長しています。

他方には、若者の生活保守主義に象徴される政治的無関心層の増加があります。ここに必要なのは

「参加と責任の民主主義」と言うべきもので、政治的实践と結びついた公民教育や18歳選挙権の導入が求められます。

それでは、政治改革で日本の政治はどう変わるのか。

まず、小選挙区制導入は、現職を圧倒的有利にし政権交代を妨げる、広く薄く支持を得る政党より強い選挙区を持つ政党を有利にする（政党のフランチャイズ化や無風選挙区の出現）などが、諸外国の例から予測されます。また、利権が1人の選出議員に集中し、腐敗をいっそうひどくすることも考えられます。

次に、政治資金規制法では、企業団体献金の禁止には合理性があるが、政党への公費助成の方は、政党の怠慢を生みかねず、監査の必要性および政治にかかるコストについての根本的な議論が待たれます。

最後に、政界の今後ですが、野党になった自民党は、かつての社会党同様、「健全野党」という姿には遠く、また、社会党は早晩分かれることになる、ということでおそらく穏健な多党制といったかたちになると思います。

〔研究発表〕

「国際理解と『国旗』の取り扱いについて」

穂別 花田 肇

基礎学力に欠ける生徒の実状から、授業の導入を円滑にするため、国旗を使った授業を試みた。

色とりどりの国旗は、そのカラフルさから視覚に与える効果は抜群で、導入部でこれを採用するメリットは大きいものがある。また、作業も生徒には楽しいものであったようだ。そして、これを手がかりにして、文化や政治、経済へと話を深めてゆくことができた。

〔質疑応答〕

政経や現代社会では国旗を扱った授業は珍しく、多くの先生方の関心をよんだ。とくに、新カリキュラムにうたわれる「国際化」という視点から、国旗を通して国際感覚を養うことに議論が集まった。また、年間で教科書を終えることができない、分野ごとの扱いに差がでるなど、各先生方の悩みが話し合われた。

数 学 部 会

〔講演要旨〕

新課程での数学教育について

大阪大学理学部教授 山本 芳彦 氏

1. 新教育課程について

教科書作成時の苦労話を交えながら、新課程の履習の流れ、重点について説明。

①大筋では、数学 I, II, IIIの順に履修していくが、それぞれに付随してA, B, Cを履習できる。ただし、履習の状況によっては、Aの内容を用いてBの指導を行なえない場合が生じることもある。

②数学 Iの重点としては、計算的なものの比重は小さくし、数学的な見方や考え方を重視しており、2次関数（変化について）、個数の処理（組合せ、数列）、確率、図形と計量（三角比）の4領域を取り上げている。しかし判別式や第n項など使用できない制限が多くある。

③コンピュータの活用についても、数学A, B, Cなど履習教科の面、教材の作成や生徒の興味喚起などの教育手段の面などで要求されている。

④数学には、学問的立場と道具的立場があり、現行高等学校数学はその中間であるが、新課程では道具的立場に立っている。

2. コンピュータの利用について

コンピュータを教える面、コンピュータを使って数学を教える面があるが、後者が重要である。また、コンピュータの設置場所とソフトを紹介しながら、数学＝計算力ではなく、いかにして数学的思考方を身に付けさせるかが重要であることを述べた。

〔研究発表〕

①紋別南 中田 清春

「数学的思考力の向上を目指した
コンピュータの利用について」

グラフィックを利用して、コンピュータをいかにして生徒に興味を持たせたかを報告。

②札幌稲西 後藤 優司

「新教育課程における情報教育は
いかにあるべきか」

複数教員による指導、教員側の資質向上など情報教育を行なう上での課題の提示。

③阿寒 浅野 泰弘

「数学の習熟度別学習指導の現状と
その課題について」

習熟度別学習を実施する中での成功例、失敗例を対比させた実践と課題の報告。

④利尻 大門 正人

「新教育課程における数学の授業について」

生徒に確率・統計の授業に興味を持たせるため、ビンゴ等のゲームを取り入れ、そのデータを試験等に利用した実践報告。

〔助言〕

- ①コンピュータの指導では、複数教員での授業が有効である。また、動機づけとして、ゲームなどの身近な教材の利用も考えたい。
- ②中学で新教育課程を受けてきたこれからの生徒に対応するため、中学の教育課程の調査や新しい発想での指導法の再検討が重要。

理科部会

全体部会

〔講演要旨〕

これからの理科教育

——科学的な探究能力の育成——

東京理科大学理学部講師 武田 一美 氏

大学生の多くは高校で習った知識と実体とがはっきりしないという現状にある。知識は身に付いているが、それが使える知識になっていない。電流を確かめる方法、豆腐の大きさの限界を求める方法、その他多くの事例でその問題にどのように取り組み、実験を計画し、解決していくかという発想をする大学生は皆無に等しい。知識を教える教育を控えて、考え応用する能力を育てる教育が大切だろう。

学生ゼミで理科を嫌いにさせる方法として次のような回答が出てきた。

1. 教師が黒板に向かって書きまくる
2. 理論や公式を暗記させるだけ
3. 大学入試問題だけをやらせる
4. 日常生活や身の回りと無関係なことばかりを取り上げる
5. 生徒が理解していなくても先に進む
6. 教科書を読み、ノートを書かせるだけ
7. 教師が理科嫌いになる

実験をさせ、身の回りの物質を扱っていくことが必要である。記憶に頼る教育は、記憶が忘れ去られることを考えていかなかった。これからの理科教育では次の「教育の三面性」のうち特に2・3を重視していきたい。

1. 先人が築き創り上げた知識、技術などを伝える。
2. これから文化を創造するための能力・態度・意欲を伸ばし育てる。
3. 環境保全についての認識と実践

科学者が研究した法則・原理を教科書にまとめ、講義・観察・実験をその伝達手段としてきたが、生徒が直接探究し分類・予想・仮説を立て、法則・原理を掴み取らせたい。

「内容教科」である理科では創意工夫により、自

ら知識や概念を獲得することを強化し、経験により理解を深めていくようにしたい。教師中心の教授を少くし、生徒中心の学習を多くする方向での授業を考えて欲しい。特に観察・実験で次の点を大切にしたい。

1. 直接経験の重視；体に書き込む教育
2. グループの人数を少なく；直接経験
3. 個別実験；個性に応じた実験
4. 帰納的実験の工夫；法則をつくり出す
5. おもしろい実験；理科離れを防ぐ

大学生が回答した授業を楽しくする方法のうち、身の回りの出来事を題材にする。学習によって得た知識を実際に使ってみる、一人一人の生徒に合った教材を用意する等を大切に、理科はおもしろいと感じられるようにしていきたいと思う。

〔質疑応答〕

岡林（札平岸）；実験には誤差があり、推論と理論が一致しないことがある。——誤差を分かる教育も大切で大雑把に表現している。

今野（琴工）；体験を重視する考えに賛同。

理科 I・II部会

〔講演要旨〕

環境問題と環境教育

元林業試験場北海道支場育種研究室長
鮫島惇一郎 氏

使い捨て、無駄使い、物資の豊かさは人間にとって、果していいかどうか。我々はもっと自然に親しみ、自然の重要さを知り、自然があって我々の生命が守られていることにより、身近かな自然から大切にしていくべきである。そういう態度を養ってこそ、本当の豊かさが得られる。

〔研究発表〕

①オホーツクの自然の授業での活用

紋別北 小島 晶夫

オホーツクの自然を歩きながら、環境問題を中心にテーマ（毛ガニ、紋別キタキツネ事情など）を掘り出した。そして、幸いにも2年前にNHKラジオの自然情報という番組に出演する機会を得、一時的にも若干のテーマをまとめた。

②栽培植物の歴史

（イネ、コムギ、じゃがいも）

北広島西 澤田 八郎

次年度から始まる新カリキュラムに向けて、北海

道の栽培植物がその自然環境に適応してきた歩を素材に、課題学習、課題研究、探求活動への活用を試みた。

③環境教材としての産業考古学教材

(ハッカ蒸留技術史・ニシン漁業史・

鉱山開発史)

札幌藻岩 山田 大隆

地域素材の教材として、自然史及び産業史資料の利用がある。

学校教育(産業考古学環境教材)の具体例、及び、教師用資料集の編成方向といった教材論での展開を具体的に示した。

④人と「ウシ」とのかかわり

札幌手稲 小島 修二

今回は、北海道内では経済面、産業面でも大きな位置を占める「酪農」にスポットをあて「ウシ」と人間のかかわりを整理してみる中で環境問題、自然、人間生活を考える一助となればと考え、取り上げてみました。特に、総合理科、生物I Aの中で扱うことはできないかと考えている。

⑤トンボ類を利用した環境教育

札幌拓北 綿路 昌史

本校では4年前からトンネウス沼におけるトンボ相について部活動を通して取り組みはじめ、今年からは生物の授業にも取り組みはじめた。

⑥助言者

道教委 一口 芳勝 氏

4つの研究発表についての指導助言あり、また、これらの教材で総合理科をふくらませて欲しい。

物 理 部 会

(講演要旨)

光を使った生体計測

北海道大学工学部助教授 清水 孝一 氏

医用工学の中の「生体機能計測の分野」が主題で、キーワードは光と通信であった。

まず通信である。生体からの情報収集を通信により送り計測者にわたすのだが、電波を用いるには限界があり光を使うに至った。応用例として間接散乱光によるテレメータがあり、NASAではペイロードスペシャリストがスペースラボ内で使用していた。

次は光である。光応用計測としては新生児の呼吸、心拍のモニタリングに成功した。そして、血流がどうなっているか、体内の臓器の検出など今や透視の

研究に力を入れている。さらに光CT技術の開発である。形体情報のみならず機能情報も得ることができる、などの利点がある。(写真を付記できないのが残念)

(研究発表)

(1)物理演習の自作とFD化

根室 富樫 一憲 札幌清田 坂田 義成

数量的扱いを通して法則を見つけ出す過程が大事で、これらを補うものとして問題集を自作し、データをFD化した。(一太郎用)厚別・清田高校で実施し、アンケートの結果生徒のレベルに合って効果的であった。

(2)光速不変の原理の教材化

釧路湖陵 石川 昌司

幾何光学の前提になっているのに教科書には書かれていない光速不変の原理について教材化を試みた。反射の法則から出発して、光速不変に気づかせ、さらに相対論へと授業を展開する。

(3)物理教育改善のためのパソコンネット

江差南 阿部 英一 石狩南 関川準之助

物理サークル北海道を発足し活動をしているが、遠くて参加できない先生の為にパソコン通信によるネットをスタートさせた。

(4)「探究活動」の教材開発と実施に向けて

札幌南陵 菅原 陽

1年間通して、おもしろく、一人一人の生徒にゆきわたり、安価にできる教材開発について具体的例を挙げて説明した。

(5)タイマーICを利用した

パソコン計測によるデータ処理

小樽商 田淵 宏司

A-Dコンバーターを使わず、タイマーICを使ってRS-232Cにより計測ができる。プログラムをC言語で作ることにより、従来のBASICの倍の速さになった。

(助言)

理科センター 永田 敏夫 氏

密度の高い、意欲的発表が多かった。また共同で研究発表があり、研究面でのチームワークが出来てきたのではないかと。さらに実践的、開発的面で協力して頂きたい。

(1)は何年来の実践の積み重ねにより私達の教材として深めていきたい。(2)は探究的で見方の違う指導

も必要である。(3)は多くの先生方の広がり期待したい。(4)は苦勞した先人的試みである。(5)は計測の活用・実践であり、理解してもらおう努力をして頂きたい。

化学部会

〔講演要旨〕

おもしろい化学の実験

東京理科大学理学部化学科専任講師

武田 一美 氏

①液体の入ったフラスコを振った時に中の液体の色が変化する実験2例。

実験を行う時には、ただその変化を見せるだけでなく、なぜそのような変化が起こるのかを推論させ、また、その推論が正しいかどうかを検証させる。そのような活動の中で生徒に科学的な思考力を身に付けさせる事ができる。

②メタノールや水素を使った爆発の実験とその応用
爆発の実験は危険なのでやらないという考え方があるが、逆にどのような場合に爆発が起こるのか生徒に理解させる事によって事故を防ぐべきである。

〔質疑応答〕

・燃料電池の作り方について

〔研究発表〕

化学ⅠAの教科書における実験の取扱いについて
札幌新川 米永 道裕

①新学習指導要領に準拠した5つの出版社の化学ⅠAの教科書を調査した所、実験の数は各社バラつきがあったが、いずれも身近なものを題材とし、探求的な実験が多く含まれている。

②市販されている「エア・マジック」という器具などを使って、気体の圧力や蒸気圧曲線について理解させる実験例。

化学実験課題の評価

札幌開成 鶴岡 森昭

5つの出版社の化学ⅠBの教科書に含まれる実験の内容をLAIという手法を用いて分析し、また、従来の教科書等と比較した結果、次のような結果が得られた。従来取り扱われていた実験では、生徒に計画や設計を行なわせるものや、実験結果を応用させるなどの活動が著しく不足していたが、新しい教科書で取扱う実験では、それらが改善され、様々な活動がもり込まれている事がわかった。

〔質疑応答〕

池田〔余市〕 どのような実験において「計画と設計」のポイントが高くなるのか。

平田（伊達緑ヶ丘）植物の研究をしているような実験室においてフリーズドライの良い方法を教えてもらえる。コーヒーに関してはスプレードライ製法もあるが試みた事はあるだろうか。

米永 スプレードライ製法を試みた事はない。北大などで行なわれる方法は安価にできるものだろうか。

〔助言〕

理科センター 鈴木 哲 氏

新学習指導要領に基づく化学の授業には豊富な資料づくりが課題となるだろう。

生物部会

〔講演要旨〕

「ラムサール湿地ウトナイ湖の自然とその保全」

財団法人日本野鳥の会 大畑 孝二 氏

ウトナイ湖の周り500haがラムサール条約に登録されている。登録地になったのは春・秋の渡りの中継地点であるため（日本に来ているマガンのほとんどが休憩する）で、かつての勇払原野の形を残し、低層湿原になっている。また、湖に注ぐ美々川の源流付近は、勇水（地下水）になっている。

この地域で見られる生物は、マガン・ヒシクイ・コハクチョウなどの渡り鳥やイジマルリボシヤンマなど3,000種もの昆虫、エゾシカやシマリス、高山、海岸性湿地植物である。多種多様な生物が見られるが、ここ10年間に湖の水位が50cmほど低下し、乾燥化が進んでいる。また、この他に、ゴルフ場・飛行場・千歳川放水路（予定）の問題がある。ウトナイ湖周辺だけでなく、美々川の水系を含めた地域の保護が必要であろうと思われる。

〔質疑応答〕

矢部（札幌）学校教育の中で保護活動をどう扱ったらいいか。

大畑 自然の中へ出ていける方法がよいが、そうでなくとも方法がある。例えば、ある小学校では、放水路について公開討論会を開いた。

〔研究発表〕

生徒が楽しめる生物の授業展開を求めて

=ゲームを通して学ぶタンパク質合成の実践=
上土幌 唐川 智幸
実験や演示実験のできない生化学や分子生物学の

分野は、生徒にとって苦痛な授業となる。これらの分野をいかに楽しく生徒に学ばせ理解させるかと模索した中で、生徒が興味関心を示すゲームの要素を取り入れることを考え、遺伝情報の伝達・形質の発現の単元で試みた。生徒にも好評であったし、定着率も良かった。

〔研究発表〕

葉の「かたち」から自然を観る
＝ヤマグワの葉形変異＝

札幌稲北 佐野 淳之

植物の中でも葉形の変異が顕著なヤマグワは、その葉の形態と環境条件に対応関係があることが認められた。一枚の葉およびそれらの集合体である葉群から得られる情報に着目し、時間と空間の中での生物の生活について議論したい。

〔質疑応答〕

矢部（札幌）葉の裂刻の意義は。

佐野 光条件の良いところでは、葉のサイズを大きくするとともに裂刻を深めることは、単にサイズの問題ではなく転流の効率を良くしているのだろうと思われる。

〔研究発表〕

野外実習を取り入れた生物の授業

富良野 鳴海 史郎

最近の子ども達は身近な自然と接することもなく、虫や鳥、植物の名前もほとんど知らない。本校付近の恵まれた自然環境を利用して、商業科3年の理科IIにおいて実験・観察・野外調査を行っている。

（野外調査についてスライドで詳しく説明）生徒達は、毎日何気なく眺めていた川の中に予想に反して多くの種が見られたことに驚いていた。

〔助言〕

唐川先生は、生徒の興味関心を引く、ゲームを取り入れたことが良かったのではないか。

佐野先生の発表は、授業にどう生かすかがこれからの課題となるだろう。

鳴海先生の行っている野外実習は、川以外にも利用できる。

地 学 部 会

〔講演要旨〕

北海道における地震活動

北海道大学理学部教授 岡田 廣 氏

今日の科学は、「断層モデル」と「プレート説」によって地震発生のメカニズムを既に解明している。また、1993年に北海道で発生した大地震のメカニズムも、地震発生後の研究により「釧路沖地震は太平洋プレート内に生じたほぼ水平な断層（破壊）による」「南西沖地震は5枚の断層面の複雑な破壊運動による」というように詳細に解明されている。しかし、地震予知は未だに困難である。

北海道の地震活動に注目すると、太平洋側では2年8か月間隔で大地震が発生しているが1980年以降は静止しており、現在は「嵐の前の静けさ」と言える。日本海側では発生間隔が比較的長いが近年短くなってきており、さらに空白域が2つあって不気味である。オホーツク海側と内陸部では、発生回数は少ないが皆無ではないため油断できない。結局どの地域でも今後大地震発生の可能性があり、しかも地震予知は困難という現状である。そこで今一人ひとりに求められているのは、地震が予知されたらどうすべきか、地震が発生したらどうすべきか、を前もって知っておくことである。

〔質疑応答〕

河村（旭川東）南西沖地震発生により、新たなプレート境界が引けるのでは？

岡田 2つの空白域に割れ目が形成されていないので、現時点では引きない。

岡本（札幌北）断層の応力はすべての事例で「押し」と「引き」が同時に働くのか？

岡田 その通り。同時でないと回転運動してしまうから。

鎌塚（中標津）南西沖地震の5枚の断層面はどのように解明されたのか？

岡田 余震分布を調べていく過程で枚数が増えて、最終的に5枚と認識された。

〔研究発表〕

(1)中標津町における天文普及活動と天文教育
——天文台の効果的利用法と可能性——

中標津 鎌塚 吉忠

1993年4日に校舎の屋上に完成した天文台は、生徒の理科教育だけでなく、地域でも有効に活用されている。完成に至るまで地学教師が何度も要望書を提出し、様々な場へ足を運んだ。地学教師が一人で担当せず校内で協力体制を作ること、地域・父母との連携を大切に継続していくことが今後大切である。

(2)半日を利用した手軽な野外巡検の試み

旭川西 平松 和彦

午後2時間続きの授業を確保して2度野外巡検を行った。小中学校で野外観察の体験が乏しいため、初歩的な内容も含めた巡検づくりを心がけた結果、生徒に好評である。

〔助言〕 理科センター 森 裕 氏

1. 地学教師は、地域を教材化するのが得意で地域に貢献する人になってほしい。
2. 天体観測だけでなく、気象観測も地学教育で今後大いに扱ってほしい。
3. 身近な事柄で生徒を驚かせてほしい。

保健体育部会

〔講演要旨〕

選択制体育の実践について

横浜市立南高等学校副校長 常木 己喜雄 氏

今、学校体育で何が求められているのか。それは、今まで決められたことをやらされていた生徒に、自分で計画を立て実践していける能力を身につけさせることである。そしてその生徒が自分自身の健康管理を生涯を通して実践していくことに期待するのである。

選択制の導入について、生徒のレベル・学校規模の問題でダメになっているところはない。最初は教員数などでうまくいかないが、大切なのは教員側の意識改革である。学校の主人公は、ダレなのか？スズメの学校からメダカの学校となるべきではないのか。選択制導入のためには、生徒の実態を把握することが大切であり、求められていることは、生徒の自己学習能力を育成することであり、運動文化論の追求であり、運動目的論の創造発展である。今回の改訂での一番の収穫は保健体育の先生が一生懸命に努力をし勉強してくれたことである。二番は、生徒達がスポーツはやらされるものではなく、自分達が生涯を通してどのように健康管理をするのか。その為は何を学べば良いかを考えるようになってくれたことである。

〔研究発表〕

選択制体育の経営計画について

＝平成5年度 選択制体育への取り組み＝
芽室 山崎 文正

自校における選択制体育の実践について別紙資料にて報告・説明をした。

5年度3年生の選択授業感想を紹介し、「選択制体育のすすめ」で締めくくった。

〔質疑応答〕

石井（函稔北） 5年度の評価方法について。
山崎 5年度は相対絶対評価を用いている。

〔研究発表〕

生徒一人ひとりが主体的に学習できる

授業の展開をめざして

＝体育授業時の心拍数変動から見た

生徒の授業への取り組みの様子＝

別海 中川 秀樹

本研究では、体育授業時の心拍数の変動と生徒へのアンケートから授業の分析を図り、現行の授業の問題を明確にするとともに、より効果的な授業の指針を別紙資料のとおり探求したことを説明・発表した。

〔質疑応答〕

依田（札幌路）測定器具は学校備品か個人のものか。
中川 出身大学より借用。

養護部会

〔講演要旨〕

養護教諭の活動と専門性

～よく生きることへの支援～

北海道女子短期大学 田崎 雅子 氏

よく生きるということは、健康に生きるということであり、健康に生きることは全てに通ずる課題である。身体的側面、心理的側面、社会的側面の3つの側面が調和していることである。健康に対する考え方も、守る健康から、自ら獲得する健康へと変化している。今後予測される健康問題としては、生命延長にともなう病気、自然破壊と人為化学的健康障害、人間関係の複雑化によるもの等がある。このような社会環境の中で、学校保健の役割について考えてみた。不登校、いじめ、心身症など生徒の健康問題も様変わりしてきており保健室は「かけこみ寺」として、マスコミに取り上げられ、その存在が世の中に受け入れられつつ上げられ、その存在が世の中に受け入れられつつあるが、これらの健康問題に対して養護教諭はどのように援助、指導したら良いのか。学校保健は、生涯を健康に生きるための基礎づくりとしての基盤とならなければならない。日本学校保健学会の保健室来室者調査によると、頻回来室者は全体の生徒の4%程度であり、保健室はこの4%の生徒にふりまわされている感も否めない。残り96%の生徒の存在も忘れてはならない。現在、養護教諭の活動の場が学校教育のシステムに位置づけられて

いないが、生徒、先生、家庭に対して、健康教育を推進する必要がある。保健室の中で、生徒と1対1の対応ではやはり限界がある。健康のベースを広く持ち、子供達の健康をどの様にしたいのか、学校経営の視点を持たなければならない。養護教諭独自の指導方法を大系化し、活動を確立するよう努めてほしい。生徒個々の保健上のニーズも複雑多様化しているが、常に心を含めた人間全体を見る目を養い、全人間的ニーズに応えられるよう努力してほしい。

〔研究発表〕

日常の保健室利用基礎集計の改善の試み

室工定制 杉山 彩子

西胆振養教研では、過去10年間の保健室利用状況の集計と考察を行った結果、①集計項目が生徒の実態にそぐわなくなっている。②相談活動が反映されていない。③統計のための統計になっていないか。④統計のデータ以外の実態をどう捉えるかなどの反省がなされ、保健室利用集計項目の改善を試みた。集計項目は従来、細分化していた項目を「内科的痛み・不調」、「心因・ストレス症状」「けが・キズ等の処置」「早退したい」、「薬がほしい」などとして、生徒の訴えを重視した。来室カードは、自由記述の様式にし生徒の気持を引き出すよう配慮した。

試行後の感想、まとめ

①従来の「内科・外科・その他」の集計方法より、改善後の方が保健室での生徒の実態をより捉えやすくなった。②生徒の感想は「自分の気持を率直に書きにくい」との事であり、来室者の多い時には手間どる場合が多い。しかし率直に書いているケースに対しては、アプローチ、指導がしやすいという利点がある。③「主訴」のカウントが原則であるが、内容を問わないことに問題はないか。例えば、「早退したい」の場合、単に早退したいのか、体調不良のため早退したいのか、体調不良であれば「内科的痛み・不調」に分類されるため、分類が曖昧になるなどの意見や問題点が生じており、今後の課題となった。

質疑として、①来室カードの使用の是非について、②集計項目として「早退したい」「薬がほしい」などの項目を体調不良の項目と同列に設定することについて、内容から疑問がありなどの意見が出て、各地区の実態報告もあった。全体的にみると、改善後の集計結果の方が保健室の生徒の実態を捉えられているが、来室カードと集計項目の内容ともにまだ試行錯誤の段階でもあり、更に工夫と改善が必要であるという共通理解が得られた。

芸術部会

全体部会

〔講演要旨〕

先生方の「まこと」とはなにか

桐朋学園大学学長 三善 晃氏

教育というものは「文化」に根差した営みであるのにかかわらず、日本の教育では国民社会と文化が関係のないシステムになっている。言い換えれば、教育と文化は切り離されているのではないか。では教育はどう文化にかかわっていったらよいのか。それを考えるには、まず日本の文化とは何かを考えねばならない。日本の文化的総体とは、八世紀来受容されてきた大陸文化を含めての多様なものの受容と伝承と言える。現代の日本の文化はその多様性を更に多様に顕現したものと言える。その上に経済の高度成長と先端科学技術の発展が、精神生活や思考様式、更に行動様式にも多大な変化をもたらした。地方の固有性が失なわれ、都会には地域社会が成立せず、大家族は核家族に分岐しただけではなく家庭そのものの基盤も確かなものではなくなってきている。そのような社会環境の中で高校生を含む若い世代は、人生を出発させているのである。その中で学校教育はどんな役割を担っているのか。学歴社会という見事に整合されたシステムこそが、人材養成の指標であり、そこから有能な人材が育ったことは確かである。しかしその結果として社会全体の競争原理に拍車がかげられた。このような環境の中での生徒の日常と立場はどうであろうか。大部分の彼らの日常は、程度の差こそあれ、コンビニと自販機で綴られていると言っても過言ではない。しかしその実態は孤独ではあるまいか。「学ぶ」という言葉は誠、信、真の「ま(の)こと」とつながっている。それを彼らに与え得ない社会が彼らを構造的な競争原理のなかに立たせている。このような生徒達の日常と現在の芸術教育はどのように交差していくのか。先生の役割は、学校の外の文化状況に向けての積極的な提起、建設的な役割、創造的な呼びかけによって教育現場と社会とを結ぶ文化、教育的脈絡を付け、教室から生活文化の言語と文法を立ち上がらせてゆくことではないのか。特に芸術の分野において、教育＝学ぶという営みは、それ自体が文化を紡ぐ行為でなければならない。先生方の内的真実と生徒たちのそれを刷り合わせ、そこに新たな人間的共感を確かめることからだけ、教育現場の文化は織られ始めるはずである。

音楽分科会

コンピュータ音楽への授業への可能性を探る機種機能及びその発達史について説明があり今回使用する「シーケンサー」の長所について ①チューニングの容易性 ②教材のポップス化 ③小人数でも多重音演奏可 ④合奏練習にも使用可ということで実際に教材で演奏してみてもさらにウインドシンセを加える。この時いかに電子の音から人間の音に近づけるか、工夫を要する所であり、コンピュータ音楽の限界を知り疑似体験という押えが大切になる。このことは指導する教師が、どういう目標目的で使用するがしっかりふまえ、時代とともに新しい楽器や機器が製作改良されてくるが音楽における基礎基本の部分の大切さも常にあるので、その点もしっかり把握指導すべきである。今日的な速い時代の流れの中で、単に音楽教育に限らず、新しい機器の利用や情報教育等との関わりはさけて通れず、教師個々が、さらに研修することを望まれている所である。

書道分科会

“表現する楽しさ”を生徒に発見させるために色々と工夫されている芽室高校の山崎先生の研究発表が行われた。導入として生徒の文字に対する固定概念を打破するような法帖から入り、徐々に生徒の視野を広げ、創作と鑑賞の下地を作る。現代書家や生徒作品の鑑賞、批評会を実施し、生徒自身が書作の方向性を見出していけるよう指導。生徒は創作への具体性を持ち始める。「『書道が楽しい。』と微笑む書道とオタクをたくさん生み出していきたい。」と先生は話す。

全体討議では ①望ましい鑑賞のあり方、指導法について。②楽しい授業、共感できる授業の二点について話が進められた。教師が動けば生徒も動くこと、グループディスカッションによる批評会の効果、鑑賞と表現力の相乗効果などが話し合われた。また、変化する現代高校生に対して芸術科はゆとりと発想の転換、そして若さを生かして接していかなければならないことを確認し閉会となった。

美術分科会

美術分科会は「鑑賞授業の一つの方向性を考える」という題の発表があった。

美術科では実技分野に授業が方寄りがちだが、「生徒に興味関心を持たせ、社会や文化への理解を求めさせる」ためにビデオ中心の鑑賞に多くの授業

時間を当てている。

「抽象作品に触れよう」という教材での授業実践報告があった。「モダン・アートを知るには抽象芸術の理解が不可欠で、文化の理解にもなる」ためである。内容は道内在住の作家と有名作家の実践を紹介している。彼らの制作過程を通して抽象作品の考え方、素晴らしさを掴み取らせるものである。

発表後、質疑応答があり、最後に助言者から、「有名な作家だけでなく、自分の作品を見せるなど身近な題材で興味を持たせ、効果を上げている」と助言があった。又、「現在の美術教科が置かれている状況を考えると、美術の教師が互いに協力し合って研修を充実しなければならない」と締め括った。

英語部会

〔講演1要旨〕

“国際性を育てる英語教育はどうあるべきか”

NHK英会話講師 グロリア・ビッシュ氏
日本留学のため岩見沢を訪れた時の失敗談をユーモアを混じえて語った後、日本の英語教育について次のような提言があった。

- ①ドイツ語しか話せなかった同氏が、sand box English を通して英語を学んだ体験からの早期に英語を学ぶことの重要性。
- ②実際に外国人と会い、話すことの重要性。
- ③英語教師への長期休業を利用した積極的な海外研修のすすめ。
- ④外国語の学習で失敗するのは当然。完全を目指すより考えをいかに伝えるかが重要。
- ⑤speech class が大変重要。まず日本語の speech class が必要である。
- ⑥とにかく外国を旅行して、自国に対する異なった見方ができるようになることが国際化につながる。

〔公開授業〕

「聞く・話す・読む・書く」の四領域の

調和した授業を目指して

札幌月寒 山形 恒則

言語の運用能力を高め、訳読中心に陥らないことが授業目標。発声練習と英語のリズムをつかませるための Jazz Chants で授業がスタート。メトロノームの音に合わせてテンポ良く進められる発声練習は、その後の新出単語の発音、本文の音読にも大きな効果を発揮。

日本語の使用を必要最少限にとどめ、paragraph ごとの heading 選び、新出単語を英語のまま考えさせる試み、内容理解の糸口となる Q & A へと授業

は展開。

まとめの T or F Questions. 声のしっかり出た Chorus reading での締めくくりで終了。

他人に優しく自分に厳しい授業者の自己採点は、生徒85点、教師50点。授業に取り組む生徒の姿勢と態度から、授業者の日常の創意工夫と熱意が伝わる授業であった。

〔講演2要旨〕

“オーラル・コミュニケーションA・B・Cの
導入と今後の英語教育”

文部省初等中等教育局教科調査官

影浦 攻 氏

- ①オーラル・コミュニケーション導入の趣旨は、従来の英語教育の反省をもとにした「音声面の重視」と「多様化の視点」。特に後者は科目の多様化に表われている。
- ②他の科目との関係では、英語I・IIを中心に重点の置き方次第で、reading, writing, オーラル・コミュニケーションA・B・Cとかわってくる。
- ③「生徒のやる気をそがない授業」を根底にsituationの設定を重視。drillsからactivityへの視点を取り入れる等指導上の留意点が数点ある。
- ④評価では「多様な物差しを使った測定」が大切と評価基準の私案が提示された。
- ⑤先に行われた公開授業をオーラル・コミュニケーションへ発展させる例として対話やドラマ化、ディベートなど具体的示唆が何点かなされ、最後に「今後の英語教育」について見通しが語られた。

家庭部会

〔講演要旨〕

「今、家庭科教育に問われること」

一親と、先生と、子ども自身の役割—

作家 永畑 道子 氏

私の父は熊本、母は博多の人である。母は美しいものを子に伝え、父からは社会に出て生きていくことの大事さを学んだ。親が生きることに必死で、その姿を子に見せていれば子は育つ。

今の子にとって、同年代が何を考え何を思っているか知ることこそ必要。是非討論の場を授業に保障してほしい。

戦前の家庭科を私は知っている。男女は同じ地平に立つべきだ。生活は常に互いに支え合うもので、かつての家庭科であってはいけない。社会科学の一つとして人間関係を学ぶ視点を持つべきだ。命を生み出す女性と企業に深く関わる男性のフィーリング

が一致した時、世の中はもっと素晴らしくなる。

夫の両親を看取った体験から、老後の生きがい、経済的自立、身近に手を差しのべてくれる人の必要性を思った。子育てや、記者としての取材から、親は子に生活を分かちることが大切と思った。端っこでよいから子は家の柱の一本として育てたい。

家庭科は人間をつくる所、今までの教育が落としてきた部分を担う。今、現場で先生が生徒と目を合わせあうゆとりはあるだろうか。今の家庭の状況を知ってほしい。子も親も同床異夢の時代に入っている。女は海のような存在でありたい。本当の女性解放とは何かを問いかける授業でありたい。

〔パネルディスカッション〕

テーマ

「新しい家庭科では、何をどのように教えるのか」

コーディネーター 松村仁穂子 (札 北)

パネリスト 渡部 真紀 (釧路湖陵)

岩佐 昭代 (札東陵)

島中 康子 (道 研)

川埜 絹子 (紋別南)

後藤あけみ (平 取)

本年4月から全生徒履修となる家庭科は、人間の在り方・生き方を自ら求め学ぶ教科である。高校教育における家庭科の役割や新しい学力観に立った指導内容・方法の発見と創造に向け、標題についてパネルディスカッションをおこなった。

1. 高校教育における家庭科の役割と生徒に学ばせたい学力について。
2. 家庭経営、保育、衣生活、食生活、住生活における指導計画、教材例、時数、基礎基本について。
3. 男女ミックスの授業での指導法の工夫。
4. 教材とその評価について。
5. 家庭科と地域社会のつながりについて。

家庭や社会での人間関係が希薄といわれる中で、真の人権感覚、男女平等が必要である。男女が同じ教育を受けることから始まる家庭科教育の意義は大きい。

農業部会

〔講演要旨〕

技術革新に対応する農業教育

文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官

佐藤 順彦 氏

全国の農業高校数は全日制高校で400校をきって398校になった。定時制高校を合わせて422校である。生徒数は14万人をきって13.8万人である。現在の大

学2年生がピークで中学1年生が横這となり、出生率が減少していることから生徒数は減る。

農業高校の自営者養成学科では非農家の生徒が多くなっており、就農率も低く、これからの農業教育を考えなければならない。

総合学科は教育内容の多様化、個々の生徒の多様化、履修システムを考えて、全国で7校が設置されている。中途退学者が多く、生徒数が減少し、多様化する生徒の個性を伸ばすという目的が総合高校設置の背景にあった。生徒の個性を鍛えるには10年間の中で好きな時期に好きなことを熱中してやる必要がある。評価の観点も〔意欲〕が加わった。

指導要録は新様式が示され、設置者におまかせする所が多いが、備考の欄がなくなった。保存期間は出欠の記録、学業成績は5年で廃棄される。

施設設備は新しく基準を作る。今回は履修する科目によってきめられる。すべて対応できるもので、課題研究、総合実習は別に加算され、40人規模で少ない時は減額となる。

総合学科の導入については、今まで農業高校が行って来た「生産」だけでなく、流通・加工・販売と幅広い教育、またその専門性の真価が問われる。生涯教育といわれる中で、農業の持つ教育力を生かしていかなければならない。農業の基礎的な科目を必修科目として履修できるようにしてもいいのではないだろうか。これからの農政を見つめながら、こうしたことを考えていきたい。

〔研究発表〕

「時代の進展に対応した特色ある

農業教育の推進について」

東藻琴 斎藤 信寛

本校は昭和28年に地域農業の担い手及び地域振興に寄与する人材の育成を目的として対立の高校〈定時制農業科〉として設置され、平成2年度からは学科名を生産科学学科と改名すると共にコース制（農業科学、食品科学、生活科学）を導入し現在に至っている。

〔研究協議〕

1. コース制の導入について各校の実態が発表され、指導体制の在り方、施設、予算、農場とのかかわり、生活科学科のコース制の在り方等について情報交換も含め話し合いが行われました。
2. 地域との連携についても各校の実態が発表され、夢を与える活力ある学校作り、パソコン、バイオの講習等、学校開放講座の開設が重要視されました。

〔助言〕

1. 新教育課程実施に伴う教員不足については文部省第5次定数改善が実施されており平成10年までには定数増となる見通しである。しかし、コース制の導入即、定員増とはならない。
2. 時代の進展に対応し学習指導要領が改訂され個性を生かす教育を推進して行かねばならない。
(多様な教科、科目の導入)
3. 学校で行っていることが地域に浸透し、地域がそれを評価する。農業を通して、人間としての基礎的な教育が大切である。(勤労意欲の高揚等)
4. 総合学科の開設にともなう、将来の農業高校は専門性の高い教育の場でなければいけない。それには、農業高校で学びたいという生徒を多く育てなければいけない反面、持ち時間数増という問題等を解決しなければならない。

工業部会

〔講演要旨〕

本道の工業教育に期待するもの

株式会社マルキンサトー取締役社長

佐藤 三男 氏

私は「分散経営の合理化」を理念としてきた。正しくは「分社経営」と言うそうである。高度成長期の時代、企業がどんどん合併して合理化が進められた。企業が大きくなると部門別の経営が強いられ、優秀な人材が多数必要になる。それならと企業を分散して経営する事を考えた。今は経済が低迷し、分散経営が良いと言われる時代になった。現在11社の関連会社を経営しているが、分散経営の合理化は正しかったと確信できる。

中小企業は、全企業の97.4%、全従業員数の80.6%を占め、多くの労働者に雇用の場を提供し、国民経済に重要な役割を果たしてきた。しかし、大企業との間には、労働条件、労働福祉の面で大きな格差がある。今後、格差是正に積極的に取り組み、優秀な人材の確保や育成に心がけ、中小企業の高度化を図って行かなければならない。

今、環日本海時代と言われ、対岸には中国、韓国、ロシアがある。そして中国等は素晴らしい発展をしている。それらの一番近い所に北海道がある。本州との地域格差是正で最も期待される事は、石狩国際港が完成して対岸諸国との交易を盛んにすることである。21世紀に向けて、国際的な視野に立ち、日本の経済を豊かにしていかなければならない。

〔研究発表〕

土木系企業の情報活用と情報技術教育について

札幌工業 横田 潤一

土木系企業の情報活用の実態を調査した。ソフト・CAD・計測制御・データベース等の利用が各業種で深く浸透しており、業務の省力化にとどまらず、発注者の多様なニーズに応えられるようになってきている。このような状況から学校においては、情報活用能力と同時にその仕事に対応する専門分野の基礎学力をより一層重視する指導が大切である。

新学習指導要領の移行・実施についての

取り組みと電気科教育の在り方について

小樽工業 小川 豊臣

平成5年10月、電気主任技術者資格の学校認定基準の大幅改正が行われ、弾力ある教育過程の編成が可能になった。これを期に、大きく電気技術者コースと電子技術者コースに分けた教育課程の編成と、いくつかの選択科目の導入、学科の枠にとらわれない他学科との連携等を今後考えてゆきたい。

学校週5日制と工業教育の在り方

釧路工業 儀同 清秀

本校は平成4年度から2年間、月2回の学校週5日制の研究協力校となった。現行の教育課程を変更せず、教科・科目の授業時数を確保する方針から、特別活動はすべて出校日となる土曜日に設定して実施した。しかし週1回のホームルーム活動は不可欠であるという反省から、継続する明年度以降は教科・科目を3単位減の87単位として実施する。

商業部会

全体部会

〔講演要旨〕

「変わる商品マーケティング」

(株)電通マーケティング総括局

消費生活研究部部長 森住 昌弘 氏

今、日本の経済も社会も曲がり角に立っているのでマーケティング戦略は重要であり、それが機能すると日本の経済突破をする力を持っていると思っています。

マーケティングそのものは技術的なものがありますが、その背後にある考え方は科学であり、目的を達成するための全体的戦略設計ということになります。

今の時代をマーケティングの側からどう捉えるか。つまり現状認識はビジネスとかマーケティングの出

発点になります。

1. 変わる消費者意識

- ①財布のヒモはさらに固く
- ②先行き不安に拍車をかける「雇用不安」
- ③購買意識は「引き締めの有無」で両極化
- ④期待される生活エンジョイ商品

2. 現在の不況をどう捉えるか。

- ①「豊かな社会」の中の不況
- ②「生活多様化」時代にやってきた不況
- ③「成熟化」社会にやってきた不況
- ④人々の生活と消費の構造変化が始まる
- ⑤平成生活様式の形式に向けて

以上のような現状認識をもってマーケティング戦略を立てるわけです。

平成不況をどう捉えるかですが、15年前のオイルショック後の不況とは大分違うわけです。

平成不況の特色について述べますと、一つに、「豊かな社会」の中の不況ということです。経済面では日本人は大変豊かな生活を享受している。過去の不況と異なるのは、日本人の消費水準が大幅に底上げされた、そんな時代にやってきた不況だということです。二つに、「生活多様化」時代にやってきた不況であることです。日本人の生活スタイルが多様化しており、人々は不況の中でも、生活スタイルに関して、いくつもの選択肢をもっていることです。三つに、「成熟化」社会にやってきた不況であるということです。日本人の生活・消費は急速に成熟化し「モノを中心とした生活の拡大は、もうそろそろ限界かな」と思い出した、そうした時期に大型不況がやってきたということです。このような状況の下に人々の生活と消費の構造変化が始まったのです。つまり、正に人々は豊かな社会の堅実生活という新しい生活ステージを進もうとしているのです。

次に、これからのマーケティングを考えるポイントについて述べますと、①品質VS価格という点では高品質の物が買われ ②消費者VS企という点ではマーケットのセグメンテーションが重要であると考えられ、広告・PR、セールス活動をいかにミックスするか、つまりプロモーションをどう効率的に行うかが問題になります。③生活信条VS涵養広告についてですが何年もかけてマーケティング活動することを目的とした広告も必要と思われます。

ポストバブルの生活スタイルに次の様な仮説を設けました。

仮説1：ポストバブルの生活は大衆と個人の「2つの顔」をもつ「個衆」が作りあげる。

仮説2：人々は生活資源（モノ・サービス）の再編集作業を開始する。

仮説3：生活信条をもった生活者が増え、生活信条に基づく消費を始める。

仮説4：ツインピークス（団塊）が市場をひっぱる。ミドル層が消費のリーダーとなる。

仮説5：生活者は消費の「同世代ゲーム」を進める。

第1分科会 —教育課程—

〔研究発表〕

地域に根ざした商業教育の活性化を求めて
—生徒自らが主体的に学ぶ教育課程の編成—

下川商業 佐藤 強・高橋 秀幸

本校は平成5、6年度「特色ある学校づくり」の推進校として指定された商業科2間口の単置校である。新教育課程編成の視点として ①基礎・基本の重視 ②生徒の興味・関心、進路等に応じた多様な選択科目の設定 ③個々の生徒の多様な学習要望に応じた専門性の深化 ④地域社会を教材化した体験学習の重視、以上の4点をかかげている。

特に④においては、札幌における「販売実習会」を本校商業教育の体験学習の集大成として捉えている。第5回目の今年度は積極的に地域の商店や関係機関を訪問し、消費動向調査やプロモーションなどの成果を活かすことができた。（実習の様子をVTRで紹介）

〔質疑応答〕

「妹背牛」選択教科をこれだけとりいれると担当時数が大幅に増えるのではないかと

数が大幅に増えるのではないかと

「佐藤」15～16程度でさほど増えてはいない。

「啓北」ボランティア活動をどのようにして生徒たちに定着させているのか？

「佐藤」入学時のオリエンテーションでその意義を説明しビデオで実践をみせている。

〔協議題〕

多様な進路に対する教育課程について

由仁商業 青山 武

(1)提言要旨

本校では進学者が増加してきており25%程度の進学希望者がいる。各学校での対応や設置科目などを聞かせてほしい。

(2)深川東商業では普通科目との選択を設け、生物もそのひとつとしている。また4グループにわけて教育課程の研修を行っている。

旭川商業では大学を受験する生徒に対し、1年次より指導を行い成果をあげた。

啓北商業では1年次の英語を1単位増し、2年次からはクラスがえて対応している。3年次の課題研究で英語の学習も可能とした。

(3)助言者（高橋教頭）

下川商業の取り組みはたいへんユニークである。資料の中の期待する生徒の資質については具体的な項目を各教科で検討し設定してはどうか。進学希望者への対応については、まず大学、短大などを受験する生徒数がどのくらいいるのか、それ以外の進学希望者に対し教育課程の編成上どこまで対応する必要があるのかが、これからのポイントとなる。また、教育課程編成後の対応も重要であり、各科目のそれぞれの指導内容の検討がどこまで進んでいるか確認しておいてほしい。

（大島校長）

函館商業も地域の期待にこたえ、多様な進路に対応するために学科転換を行った。現在校長会においても、教育課程の編成に伴い、施設、設備の充実や教員の定数改善などに関して検討をすすめているところである。

第2分科会

〔研究発表〕

これからの北海道の情報処理教育を考える

深川東商業 金子 義之

これからの情報処理教育の方向はどうあるべきかという観点で、初めに本校の情報処理教育への様々な取り組みを検証し、同時に小学科制への取り組みをまとめました。

想像以上に速いテンポで情報化、国際化が進んだ社会に即応した情報処理教育とはどのようなものか。その展望や課題点を本校の商業科の取り組みも含めて全体的に考えました。

事務情報科におけるOAの指導

＝情報通信機器を活用した

データ処理について＝

芦別総合技術 新井田正廣
末岡 正嗣

平成元年に開設されたOAは、学科の情報処理関連科目の中心科目である。OAの学習を通して、「文書処理」や「データ処理」に続き、蓄積されたデータを伝達しコミュニケーションをはかる能力を育むことが出来れば目標はほぼ達成されたことになるが、実際いろいろと試行錯誤を重ねているのが現状である。

〔協議題〕

新検定に向けた簡易ソフトの
指導の取り組みをどう行ったらよいか

仁木商業 佐々木 豊

本校の情報処理教育の取り組みは、情報処理Ⅰ（2年生）、情報処理Ⅱ（3年生）、課題研究（3年生選択）を設けて行っている。

新検定は、課題研究で取り扱うことにしたが、具体的な取り組みや位置づけはまだ定まっていない。商業科における情報処理の指導範囲をどこまで扱うかを検討していきたい。

〔質疑応答〕

「釧路商」深川東商のハードの選定の詳しい経緯について

「金子」機種選定委員会を設け、他校視察を行った。ワークステーションの構想もあったが出来ず、最終的には機種選定委員会より現在に至った。

司会者 O Aシステムの各校の取り組みについて
〔瀬棚商〕データベースソフトを利用し、生徒に商店を作らせ、自分のデザインによる帳票を作成する。

〔江差南〕全学年を通して総合実践に導入している。2年目に入ったが、問題点があり、実態に合わせて変えていきたい。

〔助言者〕

大西課長 研修センターからの情報

- ・総合実践システムの利用
- ・パソコン通信・教員研修

山田教頭、新学習指導要領が4月より実施となるが、情報処理はプログラムだけではない。コンピュータと利用技術、利用するための人の育成が重視される。

O A指導では、O A機器を活用して、一歩進んだ指導が求められる。

第3分科会

〔研究発表〕

本校における「課題研究」の取り組み
一現状における「課題研究」の

授業内容について一

妹背牛商 宮川 重徳
(齊藤 博一)
能勢 保幸

1. 「課題研究」の実施までの経緯及び内容

①経緯

平成3年度 基本方針の決定、他校視察、学習会の実施

平成4年度 実施内容の決定、生徒オリエンテーション

平成5年度 3年生で実施

②内容（3本柱）

- a. 職場実習（1学期）
- b. 職業講話（2学期当初）
- c. 課題研究（2学期以降）

2. 「課題研究」の指導の視点

- ①商業諸科目の知識・技能を応用させて、課題解決の糸口をはかる。
- ②言葉遣い・マナー及びコミュニケーション能力を身につける。
- ③職場実習を通して、職業観・勤労観を育成し、進路選択の材料とする。
- ④体験学習を通して知識・技術の成就是はかる。

3. 課題の設定について

生徒の興味、関心、能力、適性、進路希望に応じて、a) 調査研究 b) 作品制作 c) 職業資格の取得の分野から個人またはグループで適切な課題を設定させる。

4. 「課題研究」の評価について

学習段階ごとに自己評価・相対的評価を行なう。

5. 今後の課題

- ①調査研究に関する内容を精選して提示する必要性の有無
- ②調査研究費の捻出についてどうするか
- ③資格取得についての主導権を教師側におくことの是非

〔協議題〕

本校の「課題研究」の取り組みについて

士別商 木村 公治

1. 本校の「課題研究」の特徴

- ①職業資格取得を除く3分野を実施。
- ②地域に根ざした調査研究を実施。
- ③発表会を通して、生徒のコミュニケーション能力を育成。
- ④進路意識の高揚。
- ⑤教師間の連携と担当者のローテーション。

2. 今後の課題

- ①準備されたテーマと生徒の要望との差異。
- ②書籍・副教材の充実

〔研究協議〕

北見商（畑野）

職場実習を「課題研究」として扱うのは私はどうかと思う。「学習から実習へ」「実習から学習

へ」どちらの流れの方が良いのか。士別商のPOP広告は事前に学習されたのかどうか伺いたい？
苫小牧総経（小山）

- ①商業の範囲外を希望する生徒への対応方法
- ②オリエンテーションを含めた生徒へのアプローチをどの時期から実施していくべきか
- ③予算（特に収録の作成費）
- ④生徒、教師あるいはその中間と主体となるのは？

函館商（佐藤）

- ①テーマの設定難しい→教師主導型
- ②職場実習→時間内に出来ない

〔助言者〕（北見商 高谷教頭）

「課題研究」の実施校は平成5年度11校、平成6年度17校と検討校を含めると今後取り組む学校が増える傾向にある。今回の発表は「現場実習」を拠所として「課題研究」をシステム化され、大変参考になる。1学期から2学期へとどのように構築していくのかもっと研究する必要がある。「課題研究」は学科の枠をとって取り組めるので、生徒相互が切磋琢磨しながら行なえばその効果は大きい。しかし、取り組む教師の意識が生徒より低いため教師の研修が必要である。教師の意識変革なしでは「課題研究」は出来ない。

〔まとめ〕（深川東 渡辺校長）

企業内教育のあり方として、

1. 目的を明確にする。
2. 仕事の手順をきちっとさせる。
3. 実際の指導をしながらやらせる。

今までの商業教育は、知識・技術の育成に力点がおかれ普通高と何ら変わらない。これからは、“態度（物事の受け方や行動できる能力）の育成”がこれからの職業教育に必要なものでないか。

水産部会

〔講演要旨〕

これからの北海道水産業
北海道栽培漁業振興公社

副会長 菊地 健三 氏

始めに栽培漁業の歴史について、サケ・コンブ・ホタテなどを例にとり、述べられた。ヒトデなどの現在私たちが食べていないものの有効利用などに焦点を当て、これからの沿岸漁業に必要なものは、思い切った思考法の転換であることを述べられた。

次に、ヒトデのいない海ではホタテが育たないこ

と、磯焼けの海ではアワビやウニの稚貝が育ちやすいことなどの具体例を挙げながら、環境に打ち勝つ技術の開発の必要性について述べられた。さらに、これからの沿岸漁業では、漁獲の私有化が必要であることを述べられた。

最後に、オバークラフトやSFマンガを例に、将来的には自分の家から空を飛んで漁場へ向かうことも考えられるとして、物事を固定的に見るのではなく、たえず変化し発展するものと見ることが重要であることを力説された。

〔研修報告〕

次に4名による研修報告があった。

- ①産業教育指導者養成講座
谷口 潤一郎（函館水高）
- ②平成5年度高等学校産業教育担当教員長期実技研修
平沼 裕康（厚岸水高）
- ③平成5年度産業教育新技術等実技講習
木村 司（小樽水高）
- ④情報処理教育担当教員等養成講座
佐藤 哲夫（小樽水高）

〔研究発表〕

- ①「課題研究」の指導内容と指導方法はいかにあるべきか。 三浦 省吾（函館水高）
- ②「水産情報技術」の指導内容及び指導方法はいかにあるべきか。 藤原 啓展（戸井 高）
- ③漁業科の学科改編について
—漁業科から海洋漁業科へ—
東海林正行（小樽水高）

上記3件の研究発表があり、その後質疑応答が行われた。

〔講評〕

- ①課題研究の内容等の検討を早急に進めてほしい。
- ②水産情報技術の研究は、わかりやすく実験設備も工夫されており、大変立派である。
- ③学科改編における施設・設備については、予算に制約を受けることを理解してほしい。
- ④新学習指導要領は、平成6年度より学年進行で実施される。どのような職業教育を行うのか教員の理解が必要である。

北海道高等学校教育研究会会則

第1章 総 則

第1条 (名称) 本会は北海道高等学校教育研究会という。

第2条 (事務局) 本会の事務局は会長の所属校に置く。

第2章 目的および事業

第3条 (目的) 本会は高等学校の各教科などに関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図ることを目的とする。

第4条 (事業) 本会は前条の目的を達成するための次の事業を行う。

- | | |
|--------------|-------------------------|
| 1 研究会の開催 | 3 機関誌の発行 |
| 2 講習会、講演会の開催 | 4 その他本会の目的達成に必要と認められる事業 |

第3章 組織および役員

第5条 (会員) 本会の会員は北海道高等学校職員、教育委員会職員および高等学校教育に関心を有するものをもって構成し、一人一部会とする。

第6条 (教科部会) 第4条の事業を遂行するために教科部会を置く。この部会の運営は別に定める。

第7条 (地区支部) 地区支部は北海道高等学校長協会の支部単位とする。この部会の運営は別に定める。

第8条 (役員) 本会に次の役員を置く。

- | | | | |
|-------|-----|---------|-----|
| 1 会 長 | 1 人 | 4 地区支部長 | 若干人 |
| 2 副会長 | 3 人 | 5 教科部会長 | 若干人 |
| 3 監 事 | 3 人 | 6 顧 問 | |

第9条 (役員の選任) 会長、副会長および監事は教科部会長および地区支部長により選任し、顧問は推薦することができる。

- 1 教科部会長は各教科の部会から1人を選任する。
- 2 地区支部長は各地区ごとに1人を選任する。

第10条 (会長、副会長の職務権限) 会長は本会を代表し、会務を統括し、会の責任を負う。副会長は会長を補佐し、会長に事故のあるときは、その職務を代行する。

第11条 (教科部会長の職務権限) 教科部会長は各部会を代表する。

第12条 (地区支部長の職務権限) 地区支部長は各地区を代表する。

第13条 (監事の職務権限) 監事は本会の業務、会計を監査する。

第14条 (役員の任期) 役員の任期は2年とする。ただし重任することができる。

第15条 (役員会) 役員会は毎年1回定期に行ない会長が召集する。ただし必要に応じ臨機に開催することができる。役員会で討議する事項は次の通りとする。

- 1 予算および決算
- 2 会則の変更
- 3 その他重要事項

第16条 (経費) この会の経費は会員の納める会費およびその他の収入をもってこれに当てる。会費の徴収細則は別に定める。

第17条 (会計年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌3月31日に終わる。

付 則 本則は昭和38年5月25日より施行する。